地域主導による炭鉱文化の保存に関する研究
――平渓鉄道沿線にある炭鉱を事例として

王　　新　衡

1．序論

1.1　台湾における炭鉱文化の保存と地域の発展

台湾北部における石炭産業は、かつて台湾の工業化を支える原動力だった。しかし、1980 年代に炭鉱事故が頻発し、生産コスト高騰も重なり、台湾の炭鉱産業は急速に衰退していった。一部の鉱山では閉山後も採掘工具や儀器・設備、歴史資料がそのまま残され、猴硐にあった瑞三鉱業跡地と新平渓炭鉱遺跡に炭鉱文化を体験・認識してもらうための炭鉱博物館が建設された。炭鉱遺産を保存するには、地域が参加できる最良の方策を考えねばならず、産業遺産を活用して地域発展に良好な影響を与えるような要素を計画に組み込むことが必須条件となる（Oevermann et al., 2016）。また、今でも旧炭鉱集落には多数の炭鉱夫が居住し、廃鉱後の炭鉱夫の記憶保存問題や少子高齢化問題など課題が山積している。炭鉱遺産保存は、文化遺産活用に関する問題解決を図るだけでなく、炭鉱文化の保存を通して地方再生の実現を考えることが必要である。そこで、本研究では、平渓鉄道を中心として、新平渓煤砿博物園区と猴硐砿工文史館について検討し、地域主導のもとで系統的に炭鉱遺産を保存するかについて考察する。

産業遺産には、その地における様々な記憶が残っている。地域住民は産業遺産を活用することで地域発展促進を望んでおり、若者・高齢者を問わず、文化資産教育や社会福祉に対する関心が高まっている（Dirk, 2023）。このことから、炭鉱遺産を保存するには、地域衰退問題解決が急務となる。そうでなければ、地域における関心が大幅に低下し、炭鉱文化保存ですら困難になりかねないと。とはいえ、一部の人々の間では、炭鉱遺産は負の遺産であり衰退の象徴であり、たとえ文化遺産を登録したり炭鉱文化を広めたりしても地方再生にはつながらないと懸念されている。そのため、ほとんどの炭鉱遺跡が長年放置され続け、その結果として荒れ果て、一部は都市化により解体されてしまった。1990 年代に入り、菁桐住民らによって平渓鉄道と炭鉱の保存運動が起こり、2000 年にはスカイランタンと猫村観光政策の策定、炭鉱博物館設立へと発展し、産炭地では地域の炭鉱文化の保存問題を再認識しようという雰囲気が出てきた。そして、約 2000 年から文化部（日本の文部科学省に相当）から博物館と鉱業文化保存に対する支援が始まり、新平渓新平渓煤砿博物園区と猴硐砿工文史館開設をきっかけとして、全国規模で炭鉱文化の保護が推進されるようになった。こうして、台湾北部で 30 数年にわたり炭鉱文化保存運動が続けられ、炭鉱文化遺産の保護と博物館運営に力が入れられたほか、地域住民が次々と参加している。

1.2　鉱業文化保存政策の定着

文化部では近年、地域組織・博物館・独立書店など、住民参加型の地方学の研究を積極的に推進しており、文化をまちづくりと地域発展に取り入れることに期待を寄せている。台湾におけるまちづくり政策の枠組みから言えば、「民主的統治、公共参加、社会の構造改革」を目標としつつ、「公共ガバナンス、世代交代、多様性・公平性、社会共創」といったテーマを通して、地方資源の共有と共同発展を実現させたいとしている（文化部、2022）。文化部が 2019 年に発表した『文化政策白書』では、台湾は新しい文化発展戦略により文化保存を支え、文化の道により地域活性化と文化持続を促進することに期待を寄せていると指摘されている。このことからも、文化部が文化の道政策により、各地に広がる文化資源をつなげ、さらには文化財の活性化を通して地域の持続可能な開発を促進していることが分かる。

2018 年、文化部は文化の道戦略を策定。一方で、「文化の道統合推進プラットフォーム」を立ち上げ、そこ

で文化の道の関連活動を実施している。2021 年以降、文化の道戦略は文化部文化資産局に引き継がれ、これまで行ってきた産業文化遺産保存事業を受け継ぐことになった。これには、鉱業、糖業、林業、水路業など 4 産業の文化の道と多様な族群（エスニックグループ）の文化の道が含まれる。鉱業文化の道とは、炭鉱をテーマにしたものであり、文化部では、平渓鉄道沿線の炭鉱の町並みで保存されている炭鉱文化は、国内外の観光客からの人気が高く、炭鉱をメインとした文化観光面で潜在力を備えていることを発見した。そこで、平渓鉄道開通百周年特別展と関連イベントを企画し、鉱業文化の道政策の定着を図ることで、地方政府と住民が協力して、平渓鉄道の炭鉱文化資源をつなげている。台湾ではすでに 40 年近く炭鉱採掘が行われていないものの、鉱業文化の道では地域参加を強調することで、石炭採掘場の鉱山主と炭鉱夫が運営する炭鉱博物館を結びつけている。

図 1　平渓鉄道開通百周年特別展ポスター

1.3　研究目的

炭鉱文化保存を地方再生に組み込む視点から、平渓鉄道沿線における炭鉱文化保存の歩みを分析し、政府と民間との協力の下で、1990 年代の石炭文化保存政策から鉱業文化の道を通して炭鉱文化の地域文脈を守ることについて考察する。本研究を通して、平渓鉄道沿線に分布する新平渓炭鉱遺跡と猴硐鉱遺跡を改めて見直し、地元で炭鉱文化をどう保存していくか、また文化の道政策を通してこれらの炭鉱遺産と結び付け、有効的に活用されることを期待する。台湾北部は鉱業資源に恵まれ、その存在は非常に重要でありながら、社会や各界の炭鉱文化保存に対する意識は極めて低い。しかし、鉱山主の廃鉱後の炭鉱遺跡保存に対する意欲が高ければ、炭鉱を系統的かつ完全に保存するのに有利となる。一方で、炭鉱夫が炭鉱町で歴史の口頭伝承や記憶保存を呼びかければ、炭鉱無形文化遺産の保存にも大きく役立つと思われる。平渓鉄道沿線の炭鉱文化保存について明確にするために、本論文の研究目的を次の通り整理する。(1) 1990 年以降の平渓鉄道に関する重要な保存運動のまとめ、(2) 鉱山主による炭鉱遺跡の系統的な保存方法、(3) 炭鉱夫による炭鉱町の記憶と石炭採掘技術の保存方法の検討、(4) 鉱業文化の道と平渓線鉄道の炭鉱遺産とのつなげ方の研究。

2. 平渓鉄道とその沿線に分布する炭鉱遺跡の保存

2.1　平渓鉄道発展の栄枯盛衰

早い時期、平渓地区は丘陵地や谷間が多く交通の便が悪かったため、人々は川を遡ったり、ゴンドラを使ったりして物資の運搬を行っていた。日本統治時期初期には平渓庄長の潘炳燭によって、平渓に石炭の露頭が地上に露出しているのが発見され、日本の藤田組から石底鉱区初となる採掘権が申請されたが、険しい地形で運送に困難を来たすという判断から石炭採掘計画は頓挫してしまう。その後、基隆在住の顔雲年が平渓地区における広い炭田で採掘を始めようと、彼が経営する台陽砿業株式会社が出資して運炭鉄道である「石底線」の建

設に着手し、ついには 1921 年 7 月に完工した。台陽鉱業株式会社の資本額はわずか 500 万円であったにもかかわらず、平渓線の総工費は約 224 万円に上り、台陽鉱業がこの鉄道を経営するのは困難となり、1929 年に台湾總督府が全長 12.9 キロメートルの石底線を買収して官営鉄道とし、「平渓線」に改名した（王新衡, 2018）。

1980 年代以降、炭鉱産業の衰退により平渓線は長期にわたり赤字経営だったものの、菁桐を中心として住民が保存運動を行い、平渓線は台湾でも重要な観光鉄道へと姿を変えていった。菁桐は、平渓線沿線にある台陽鉱業の主要な鉱区であり、地域住民による熱心な保存運動のおかげで、今でも数多くの炭鉱遺跡が残されている。1990 年代には、菁桐で「煤砿火車恋旧会」が結成され、この会が平渓鉄道と炭鉱文化を保存するきかっけを作ることになった。この住民組織の活動は当初、鉱業遺跡に関する環境整備から始まり、さらに「中秋の夜、列車の汽笛、炭鉱風情」、「『恋恋風塵』、平渓の人を訪ねる」、「空を舞うランタン」といった重要なまちづくりの行動へと広がり、その後次第に地域への愛着や一連の地域再生のための行動へとつながっていった。

図 2　菁桐駅行内と石炭遺跡

2.2　平渓鉄道文化の保存と観光開発

1990 年代に始まった炭鉱文化保存運動を機に、石炭採掘に対する炭鉱集落の地域文脈に注目が集まるようになり、平渓線と炭鉱関連遺跡を結び付けることで、徐々に地域で保存型まちづくりの体制が確立されていった。平渓線はスカイランタンと鉄道観光に支えられて年間 700 万人を超える観光者が足を運ぶホットな観光スポットに成長。当初スカイランタンはただの「空を舞うランタン」というコミュニティ活動にすぎなかったのが、今では大勢のインバウンドでにぎわう人気コースになっている。平渓線の観光鉄道転換戦略に合わせ、スカイランタン文化フェスティバルは 1992 年から平渓区公所（区役所に相当）が主催することになった。1999 年には、台北県政府（県庁に相当）により平渓国際スカイランタンフェスティバルが開催され、平渓のスカイランタンは世界から注目を集める重要な観光スポットとしてのイメージ作りに成功した。しかし、ほとんどの観光客はスカイランタンを上げることだけを楽しみ、炭鉱遺産を訪ねることにはつながらなかった。また猴硐に猫村が開設されると、多くの観光客誘致に成功したものの、やはり地域の炭鉱文化保存の助けにならないばかりか、逆に炭鉱夫たちの反感を買うことになってしまった。

2.3 「鉱業文化の道」政策の策定

鉱業文化の道政策は、これを通して長期にわたり地域組織に寄り添い指導する体制を整え、地域が炭鉱の歴史や文化に関する資源調査、文化財保護、文化施設運営を継続できる力を育成することを目的とする。台湾における文化の道政策は、開始当初は文化資源と産業鉄道を線で結び、物理的なつながりと文化体験活動を行う体制だったが、それでは観光産業だけが注目され、文化の持続可能な発展や地域再生とつながっていないので

はないかという疑問の声が上がった。台湾の文化部は、2016 年に 2017-2020 年に実施する「台湾・文化の道づくり」計画を打ち出しており、それには以下の重要 2 戦略が含まれる。

1．重要文化遺産の発展、文化施設の運営、「スマートシティ」の施政に合わせ、政府資源を活用して台湾の歴史・文化の統合を行い、テーマ型の「台湾・文化の道」を多数創出する。
2．台湾の文化政策を活用することは、観光旅行の「質」、「各分野での生産高」、「高付加価値産業」の向上に役立つだけでなく、様々な文化施設の運営管理の強化にもつながる。（文化部 2017-2020 年中期計画より引用）

2020 年以降、文化資産局主導の下、コンテクスト（Context）、コンテンツ（Content）、異文化の総体的な意義（Cross-cultural significance as a whole）、動的特性（Dynamic character）、場面設定（Setting）、そしてヨーロッパにおける文化の道で強調されている地域の垣根を越えたもの、科学技術の運用、持続的発展、文化をめぐる旅といった地域活性化に対するビジョンが文化の道の構成要素とに盛り込まれた（林曉薇等、2021）。このことから、文化部が文化の道計画を実施するのは、台湾の文化の主体性を明確にするためであり、とりわけ産業文化の道について、産業史と地方史からの地域文脈を叙事的な方法で表し、多様な文化資源の統合を目指していることがわかる。

鉱業文化の道を中長期目標から見ると、鉱業に関する調査研究を進めることで地域の鉱業知識を確立することを目指すものであり、平渓鉄道の鉱業文化の道から言えば、猴硐産炭地での炭鉱夫の記憶と新平渓の系統的な保存を統合した実施を望むものである。例えば、文化部文化資産局が推進する産業遺産と文化の道政策の下では、2024 年に再び「鉱業田野学校」を炭鉱文化普及拠点に位置付け、住民主導による地域の公共事業参加を進めることで、人々と炭鉱遺産のつながりを強めつつ、社会における炭鉱文化保存のコンセンサスを得ることを目指している。ここでは、地域の炭鉱遺産保存に関する問題解決に取り組み、炭鉱町で自主的な調査研究と資源共有を通して、地域にいる炭鉱夫と鉱山主による保存を促進し、炭鉱遺産を世の中に広めていくことが主な任務だ。系統性とコンテクスト性を備えた炭鉱文化講座を開設し、国内外における炭鉱遺産保存と保護、観光産業と持続的経営といった関連戦略を参加者に深く理解してもらうことを目指す。このことから、鉱業文化の道政策は、文化財、文化施設、商業組織を一つにすることで、高い質を備えた文化・観光、文化産業の持続可能な発展、地方再生といった多様な分野で価値の創出を目指すものであることが推察される。そのため、文化の道は台湾の『文化資産保存法』というガチガチの法令のようなものでなく、柔軟性がある文化普及と文化産業協力体制のようなもので、地域文化を広める力を強め、さらにそこから地域振興促進を目指すものであると言えるだろう。

2.4　炭鉱文化の道のテーマの実現

平渓鉄道は炭坑文化遺産と結び付けることで、鉱山主から炭鉱夫に至るまでの炭鉱歴史文化を統合し、炭鉱遺産群を設立して、文化の道の普及拠点とする計画だ。さらに地域組織と地域住民からの協力を取り付けつつ、教育推進活動と文化観光産業発展にも転用する。次に、鉱業文化の道と炭鉱遺跡を結び付けたテーマについて考察する。

1．平渓鉄道と駅：瑞芳、猴硐、三貂嶺、大華、十分、望古、嶺腳、平渓、菁桐などの駅をつないで鉄道沿線に分布する鉱業文化資源の統合を促進する。
2．4 大炭鉱町の集落地域：猴硐瑞三鉱業集落（瑞三炭鉱周辺、瑞三本坑、復興坑等）、菁桐台陽石底炭鉱集落（菁桐鉱業生活館、菁桐炭鉱紀念公園、石底集落等）、十分新平渓炭鉱集落（新平渓炭鉱、十分集落等）、平渓駅生活集落（周囲の炭鉱、古道、平渓集落等）。
3．新平渓炭鉱の鉱業遺産の系統性：新平渓炭鉱の炭鉱口、事務所、機械設備、浴場と更衣室、捨石山、トロッコ道、回転台、選炭鉱、卸煤櫃、専用側線。
4．猴硐炭鉱夫の集落文化：瑞三介寿堂、福利社、炭鉱夫宿舎、侯硐駅周辺の市場、土地公廟、瑞三本坑と復興坑周囲。
5．炭鉱町における宗教と信仰：石底山神宮、石底殉職者慰霊碑、平渓観音巖、南無大悲救苦観世音菩薩碣、

新平渓頂渓廟、十分成安宮、嶺腳霊巖寺、猴硐神社、各炭鉱の土地公廟。

3. 炭鉱博物館における鉱業文化の保全

3.1 公立炭鉱博物館

菁桐駅のそばにある「菁桐鉱業生活館」は、かつては台鉄の休眠宿舎だったが、今は鉱業の歴史と地域文化をテーマとした博物館として活用されている。2001 年に台北県政府が菁桐の老街と周辺環境の景観の改善に取り組み始めたのにともない、平渓線の台鉄旧宿舎修繕も行われた。2002 年には菁桐鉱業生活館が設立され、平渓区公所がこの博物館を運営している。観光者は市指定史跡である菁桐駅で列車を降りると、1929 年に建てられた木造の駅舎が目に入る。そして、菁桐鉱業生活館では、平渓線と菁桐鉱区の歴史・文化を探索することができる。菁桐鉱業生活館の 1 階は、菁桐地区の炭鉱と平渓線鉄道、滝、壺穴地形等の自然環境やスカイランタンを含む文化や景観などを紹介する常設展示場になっている。2 階は「炭鉱文物展示館」という特別展室で、早い時期における平渓の炭鉱関連の歴史的資料や近くにある石底大斜坑、台陽倶楽部、選炭鉱等の模型が設置されており、そこから地域の炭鉱が全国の炭鉱に占める石底大斜坑の重要性が示されている。

図 3　菁桐鉱業生活館

一方、平渓の東北の端に位置する猴硐は、かつて瑞芳区において重要な石炭産地であり、日本統治時期にはこの地の炭鉱が三井企業から瑞芳の有力者である李建興一族に売却された。そして、1934 年に猴硐で瑞三炭鉱が設立され、その後台湾内で最大の炭鉱生産量を誇る炭鉱へと成長したが、1990 年に閉山。2004 年に台北県政府によって「猴硐煤砿博物園区」の設置が計画され、2010 年に瑞三炭鉱遺跡からなる園区の運営を観光旅遊局が開始した。ここは選炭施設、事務所、運炭橋等の炭鉱遺跡から構成されており、周辺にある金字碑古道や三貂嶺瀑布（滝）、猴硐駅等の観光スポットとともに、瑞三炭鉱の歴史や文化について展示している。しかし、公立炭鉱博物館として残念だったのは、運営機関が文化担当機関ではなかったことだ。そのため菁桐鉱業生活館では、まちづくり計画を立て、推進を後押しする意向があっても、炭鉱関連の展示内容や教育活動に乏しいため、菁桐地区における炭鉱文化の保全を行うことが難しく、30 年前の平渓鉄道のまちづくり理念の継承も困難を極めた。一方では、平渓のスカイランタン体験を中心とした観光イベントが次第に形成された結果、スカイランタンを目当てに十分駅周辺だけに観光客が集中してしまった。また、猴硐煤砿博物園区では、一部の炭鉱遺跡が残っているとはいえ、遺跡と遺跡の間には文化活動や空間活用を行う場所が不足しているため、猴硐駅周囲と猫村に観光客の足が向かってしまっている。2022 年に瑞三整煤廠が修復され、地域最大規模を誇る展示空間が誕生したものの、展示内容と炭鉱関連活動に乏しい上に、情報センターという位置づけの下では、その地域で最も重要な炭鉱のランドマークが残念ながら炭鉱町や集落が共有で保存していく炭鉱文化として結びついていない。

図 4　猴硐煤砿博物園区の瑞三整煤廠

3.2　鉱山主が設立した炭鉱博物館―新平渓煤砿博物園区

1.　新平渓炭鉱遺跡の博物館化

1965 年から採掘が始まった新平渓炭鉱は、新北市平渓区十分寮にあり、1997 年に閉山した。新平渓炭鉱の龔詠滄董事長は、台湾の炭鉱文化遺産を保存するために、採掘権を保留し、2001 年から建設準備を開始、2003 年に台湾炭鉱博物館として開館した。新平渓園区には、新平渓炭鉱の遺跡や遺構、資料・文献、設備道具が昔のままの姿で残されており、炭鉱産業を系統的に見学できる炭鉱博物館だ。つまり、新平渓煤砿博物園区には、石炭を採掘する工業施設、鉄道レールや橋樑の土木構造物、炭鉱夫の住宿施設、堆積場など完全な姿で炭鉱産業の遺産が残されており、石炭採掘から運送までの過程がそのまま見られる炭鉱教育の場でもある。

図 5　新平渓煤砿博物園区

2013 年、鉱山主の龔詠滄の息子である龔俊逸が新平渓煤砿博物園区の経営を引継いだ後、新平渓炭鉱遺跡の点検と園区の再整備が行われ、選炭鉱区域から平渓線鉄路をつなぎ、炭鉱の地景を昔のままの姿で保存し園区の案内サービスを開始するなど、鉱業関係事業を拡大していった。また龔俊逸は、国際交流にも積極的に取り組んだ。「田川石炭歴史博物館」及び「釧路博物館」と友好館協定を締結し、長年にわたって日本の炭鉱文化を代表する博物館と協力関係を強化したほか、2024 年には日本の「全国石炭産業関連博物館研修交流会」を開催し。日本や韓国から炭鉱文化の専門家や学者が 30 数名参加するなどして、東アジアにおける炭鉱文化交流が活発化している。また毎年開催されている炭鉱の国際シンポジウムや文化活動を通じて、炭鉱文化保存

と博物館運営の見直しを図り、新平渓炭鉱を台湾の炭鉱文化と世界をつなぐ窓口へと変えている。

図 6　新平渓煤砿博物園区と釧路博物館との友好館協定

図 7　新平渓にける全国石炭産業関連博物館研修交流会

2. 炭鉱文化遺産価値活用戦略と課題

新平渓炭鉱建造物群は、戦後に鉱山採掘にからむ困難を克服した典型的事例の象徴であり、台湾の炭鉱技術の導入と発展を表している。戦後、台陽鉱業公司と現在の龔氏一族によって、その後の炭鉱採掘が進み、それにともない技術も発展を遂げた。例えば、設備の買い替え、操作技術の向上、採掘の機械化推進など歴史コンテクストに力を注いだ。さらに新平渓は平渓線沿線にある台陽社が最後に採掘を行った鉱山があったため、同社は廃鉱した各地の設備道具をこの地に集めた。こうして新平渓には瑞芳やその他の炭鉱の建造物や設備道具が残されており、台湾北部の炭鉱建造物においても多様な文化の特色を呈している。

新平渓煤砿博物園区は、世界でもまれな鉱山主自身が長期運営を行っている大型博物館である。ここは炭鉱の遺跡や遺構、資料文献と設備道具が完全な姿で残されており、石炭の形成から分布・採掘・運送に至るまで一貫して見られる炭鉱遺産だ。2021 年の平渓鉄道開通百周年記念行事の際には、新平渓煤砿博物園区で『平渓鉄道の百年特別展』と平渓線の列車に乗りながら沿線の駅周辺にある炭鉱をめぐる関連イベントが開催された。30 年近くに及ぶ炭鉱博物館運営で、平渓における文化・観光の改善を目標として、産官学界や地域の炭鉱夫、地場産業との提携を継続してきたばかりでなく、このような活動を通して、地域の人口減少問題の解決を図り、地方創生を促進してきた。このような背景から、新平渓煤砿博物園区では 2022 年に地方創生会社を新たに設立し、鉱業文化の道など関連政策に合わせる形で、炭鉱文化に関する教育の普及や文化活動や観光事

業にも積極的に取り組み、そこから平渓地区でのスカイランタンだけを目当てとした観光への偏りと高い同質性と集中化の問題を改善している。さらには文化景観から炭鉱遺跡を保存し、観光産業と文化保存を両立できるように願い、文化財の登録申請も行っている。

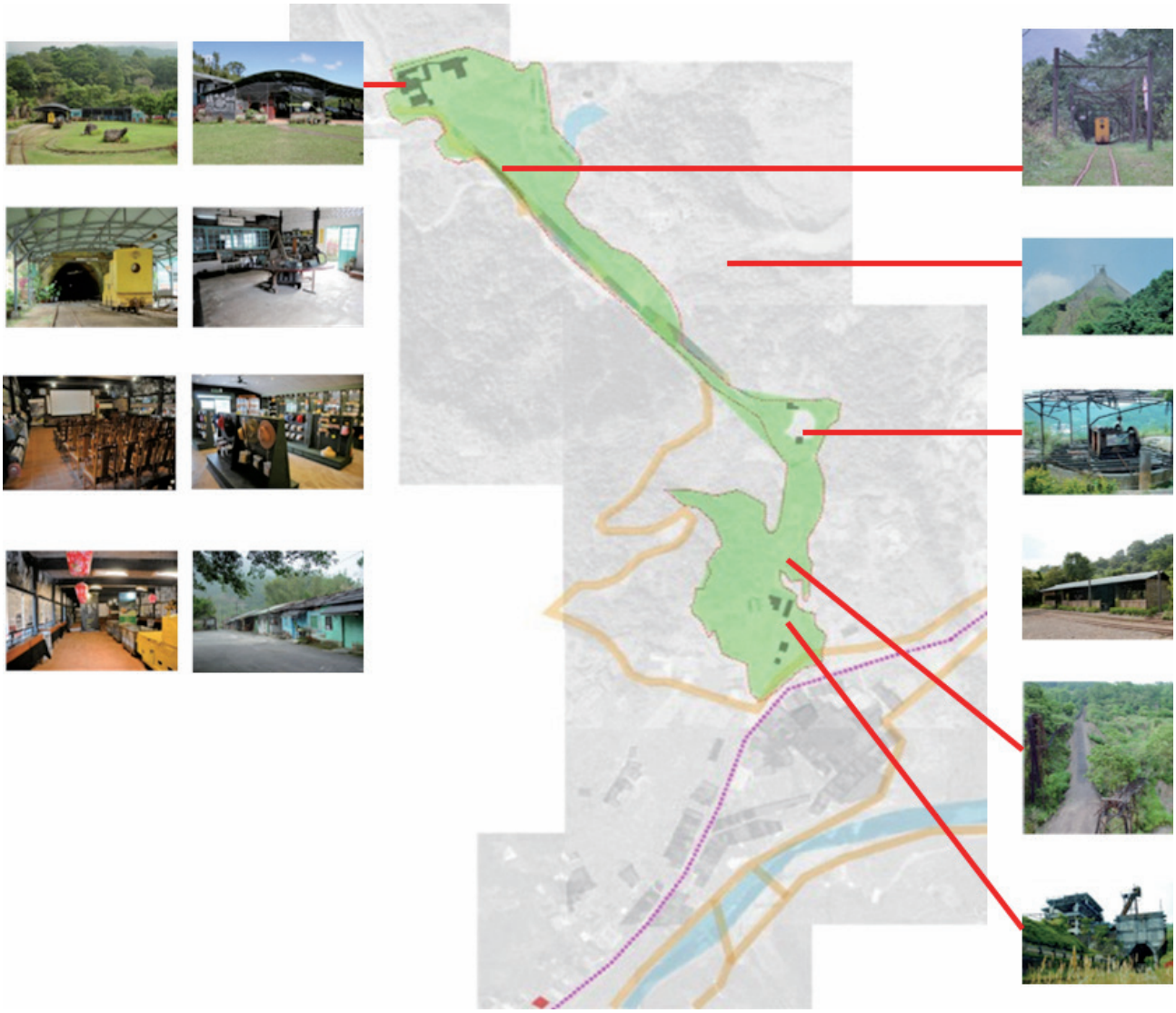

図 8　新平渓煤砿博物園区全体の石炭遺産（出典：新平渓煤砿博物園区）

図 9　新平渓煤砿博物園区における地方創生活動（田川炭坑節まつりの体験）

3.3　炭鉱夫が設立した炭鉱博物館―猴硐砿工文史館

1. 猴硐砿工文史館の設立

新北市瑞芳地区は、かつて台湾で最も重要な炭鉱の一つだった。以前はこれら炭鉱夫の歴史の記憶の収集や構築を行う専門的な歴史機関がなく、2019 年頃になり、炭鉱夫である周朝南が炭鉱夫を集めて、自発的に元瑞三本鉱そばの建造物群に石炭に関する資料館を建て、「猴硐砿工文史館」と命名した。炭鉱夫らは、博物館を本拠地として猴硐炭鉱の調査研究を行いながら、園内で案内ボランティアをしていた。これは炭坑離職者らが自主的に炭鉱の文化・歴史に関する資料・材料や石炭採掘関連の歴史的資料を収集したことを象徴している。自発的に鉱業に関する資料文献を保存し、歴史を積極的に語り継いでいくことは、猴硐の炭鉱文化を保存できるほか、観光客が猴硐の発展と瑞三鉱業との関係を理解するのにも役立っている。炭鉱夫は初めの頃、炭鉱夫年金の支給を求めていたが、その後炭鉱夫の文化保存のための文化活動への取り組みに変化していった。これは社会や各界から炭鉱夫に対して関心を寄せてもらい、それが炭鉱文化保存への注目につながり、さらには博物館で猴硐鉱山の案内を通じて、社会や各界から炭鉱文化保存に対する共通認識を得たことを示している。このことから分かるように、炭鉱夫自身が自分たちの炭鉱文化を再認識し、炭鉱夫の通用する言葉でかつての炭鉱労働者の歴史を語り、炭鉱社会における人間的価値を表している。炭鉱夫からの要求に応えるべく、2024 年からは猴硐砿工文史館の運営は「経済部地質調査及び鉱業管理センター」に引き継がれたが、炭鉱夫は引き続きボランティアとして協力を続けていることから、今後も国レベルの炭鉱博物館として躍進することを目指している。

図 10　猴硐砿工文史館と創立者の周朝南夫婦

2. 炭鉱夫の年金要求から文化保存へ

当初、炭鉱夫の年金支給を求めていた「新北市退休砿工交流協会」の中心メンバーによって猴硐砿工文史館が作られた。炭鉱夫に対する年金支給要求は失敗に終わったものの、近年になり炭鉱夫は各界から注目されるようになり、そのうち鉱業の文化・歴史の保存へと活動内容が変わっていった（王新衡、2022）。猴硐の炭鉱夫は、自分たちが携わった労働の歴史を残すために、積極的に鉱業に関する歴史的資料や文献の保存を行ったほか、鉱業文化普及にも積極的に取り組んだ。猴硐の炭鉱夫は、鉱業専門用語の研究から炭鉱町の記憶保存、古い写真や書類などの収集を行う一方で、自身の鉱業知識と炭鉱町での生活経験を語るために連日猴硐で鉱業に関する案内を行った。猴硐砿工文史館には専門分野が異なる労働者が集結し、歴史的資料の収集や案内面で専門的な産業の系統性や炭鉱町での生活も多様な文化的価値を備えていた。このことからわかるように、初期段階では炭鉱夫の権利保護を目的に集まった炭鉱夫だったが、そのうちに社会的な公共性と公益性のために、社会的行動により炭鉱夫の歴史・文化の保存にシフトしたことで、広く大衆社会から鉱業文化に対する関心が集まることになった。

図 11　鉱業専門用語の研究会

3. 炭鉱夫ネットワークで支える炭鉱文化の保全

炭鉱夫は、地域での案内ボランティアと瑞三鉱業遺跡群とを組み合わせ、瑞三本坑に猴硐砿工文史館を設置し、そうしてバラバラだった猴硐煤砿博物園区を一つにまとめ上げた。炭鉱夫の間では、長い時間をかけて炭鉱町における炭鉱文物収集、歴史調査、案内解説制度について共通認識に達しており、かつて石炭採掘を行っていた労働場所と炭鉱町での生活体験を猴硐砿工文史館という博物館を通して炭鉱文化の保全を行っている。

猴硐の炭鉱夫は、瑞三本坑を頑なに守り続けているだけではなく、長期的な炭鉱文化の保全により政府や民間機関から支持を取り付け、社会からも大きな支持を得た後で、炭鉱文化の普及を図り、学校で炭鉱授業を行ったり、地域観光において炭鉱夫の話題を絡めたりして、さらに多様な社会的ネットワークを構築したいと考えている。猴硐砿工文史館は、世界でもまれな炭鉱夫らが自力で設立した博物館だ。長期にわたり各地の鉱業文化を研究し、台湾の経済発展に対する炭鉱の影響、炭鉱災害の悲惨な記憶、炭鉱町からの地域再生など、長い間なおざりにされてきた炭鉱夫の労働文化に社会から注目が集まるようになった。社会からの支持を得ると、中央政府や地方政府からの経費拠出、学校での授業、文化保存組織の発足など、外界からの資源もどんどん入り込み、猴硐炭鉱文化保存運動に対する支持に還元することで、社会全体から炭鉱文化を支えていこうという共同パワーへと移り変わっていった。言い換えれば、猴硐砿工文史館は、炭鉱夫の労働に対する集団意識が炭鉱関連の社会的グループの目に留まり、そこから一般の大衆社会による炭鉱保存の共通認識と実際の支持をもたらし、鉱業文化面において強力な社会支持ネットワークを構築することになった。中央政府は、猴硐砿工文

図 12　猴硐砿工文史館から経済部地鉱センター展覧室への移転セレモニー

史館の運営を支えるために、2024 年より経済部地鉱センターを同館にも設置し、国立炭鉱博物館開設を目指し、炭鉱夫らと密接に協力しながら炭鉱文化を保全させていくとしている。

4. 平渓鉄道炭鉱文化保存行動の特徴

4.1 地域参加型の炭鉱文化保存事業コンテクスト

平渓鉄道沿線に分布する炭鉱保存運動の発展コンテクストは、政府による政策推進下で、新平渓煤砿博物園区と猴硐砿工文史館を主な地域運営の拠点として、地域の炭鉱遺跡と炭鉱夫の記憶を炭鉱文化の教育と地方再生の原動力としていく計画だという。主なコンテクストについては、次の通りまとめる。

1．文化部では 30 年という時間をかけて博物館、まちづくり、文化財の保全の定着を図っており、2015 年頃から積極的に炭鉱遺産の保存に取り組み始め、2021 年には平渓鉄道開通百周年の関連行事と鉱業文化の道を実施した。
2．新北市政府は 20 数年にわたり新平渓のスカイランタンイベントと猴硐の猫村観光政策を推進し、猴硐煤砿博物園区と菁桐鉱業生活館を設立した。しかし、長年、炭鉱文化の保全が行われず、2020 年から文化局によりデジタルアーカイブの「国家文化記憶庫」での炭鉱文化保存が開始された。その後も平渓区公所の協力の下、平渓鉄道沿線に分布する炭鉱文化保存が継続されている。
3．新平渓炭鉱は、そもそも鉱山主自身が経営していた炭鉱であり、炭鉱博物園区が形成されてからは地域組織との連携を強化し、炭鉱教育普及の拠点となっているほか、地方創生のサポートも行っている。
4．炭鉱夫らが組織的に遂行している地域に密着した行動で、初期段階では新北市退休砿工（炭鉱夫）協会が主導して煤砿文史館を立ち上げ、さらに猴硐砿工文史協会が発足し、炭鉱町に暮らす炭鉱夫に炭鉱文化の記録と保存運動への参加を呼びかけている。
5．地域の学校における炭鉱文化教育と商店街組合による商業活動においても、平渓区公所をはじめ、新平渓煤砿博物園区、猴硐砿工文史館などと協力して炭鉱と鉄道の文化の保全を行っている。

このように、当初は地域で平渓鉄道と炭鉱遺産の保存の呼びかけだったのが、政府と民間企業でも炭鉱博物館を設立して、平渓の炭鉱文化とその地景を保存する動きが広がった。しかし、20 年ほど経っても、地方政府は平渓のスカイランタンと猴硐猫村の PR だけに力を入れるという状況が続いた。そして、別のところで炭鉱文化政策と地方組織の再組織化が行われ、炭鉱文化の道を通して平渓鉄道沿線に分布する炭鉱文化資源がつながり始めた。

4.2 炭鉱博物館による炭鉱文化と地景の保存

文化部は地方政府や民間組織と協力して、鉱業文化の道を通して炭鉱遺産を保存することで、炭鉱文化施設、教育機関、炭鉱夫等と結び付け、部会を越えて地域での活動を展開している。最初は炭鉱文化と地域の記憶を活用して有形炭鉱遺産の保存を行いつつ、鉱業文化の道により炭鉱文化資源を促進し、持続可能な発展を目指していた。ボトムアップに向かって地域での炭鉱に対する共通認識を作り上げ、炭鉱文化資本を積み上げ、長年蓄積されてきた平渓と猴硐での文化観光問題の改善を図ろうとした。それまでは、炭鉱博物館では系統的に炭鉱遺跡を保存する体制が作られていなかった。また統括的に炭鉱文化を保全することも難しく、展示施設不足や地域住民の参加意欲の低さも重なり、炭鉱文化の拠点づくりが困難を極めた。近年では炭鉱文化保存政策と鉱業文化の道関連政策推進の下、前述のように 4 カ所の炭鉱文化施設が炭鉱文化保存拠点となり、次第に地域の炭鉱展示・文化普及拠点へと発展しつつある。

新平渓煤砿博物園区は、文化部からの支援を受けて、炭鉱遺跡調査を終え、園区内での展示と活動を充実させつつある。近年では、積極的に「地方創生」事業に取り組み、平渓区公所をはじめ、学校、商店街、他の鉱業博物館を含めた地域との連携をさらに強化しており、台湾で炭鉱文化保存を通して地方再生促進の重要な事例となっている。猴硐炭鉱文化の保存については、近年では地域の炭鉱夫が組織の垣根を越えて調整と協力を行っている。下の図は地元主導による炭鉱文化保存活動における政府地域組織との連携と影響するメカニズムである。

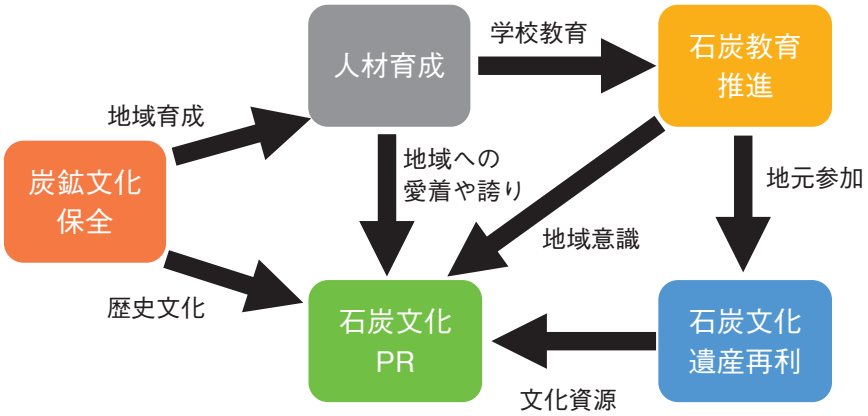

図 13　地域組織主導による炭鉱文化保存のメカニズム

4.3　炭鉱町における地元の再組織化

平渓鉄道沿線にある炭鉱町では、鉱業文化保存という共通認識により地域での組織化が促進されている。このような自己組織化（self-organization）は、地域の意向が有機的に発展することで炭鉱文化保存の住民組織が作られ、それと同時に外部組織からの支援も受けている。そのため、文化の道の組織化制度は、それぞれ異なる組織による協力の過程であり、炭鉱地域文脈を統括して保存するために、互いの資源を共有することで炭鉱町の内外部からの支援系統を支持するという形が取られている。例えば、猴硐砿工文史館のケースでは、炭鉱文化の保存や鉱業文化活動を開催する過程において、段階的な問題を解決するためにその都度調整を行っている。例えば、政府、学校、文化機関からの支援を猴硐砿工文史館が受ける場合、炭鉱町に暮らす住民と外部の資源が互いに支え合い、議題に応じた相互協力を行い、炭鉱文化保存組織ネットワークを形成する。

平渓鉄道沿線に分布する炭鉱町の文化保存は、ネットワークが複雑に入り組んでおり、各炭鉱町や各テーマに応じてサブ系統が形成され、平渓鉄道全体と結ばれてはじめて完全体となり、共同目標に向き合い、情報と資源を相互で共有する。例えば、新平渓園区では平渓鉄道開通百周年展示会と関連活動を開催するために、自身の炭鉱系統を十分地域と連携させただけでなく、菁桐・平渓・猴硐などの地域と協力して資源の共有を行った。1990 年代には菁桐地域から炭鉱文化保存運動が始まり、平渓鉄道沿線の平渓・十分・猴硐を含む 4 大集落に影響が及んだ。それから 20 数年後にも地域での再組織化が行われ、新平渓園区で鉱業文化の道と地方創生のプラットフォームが構築された。猴硐砿工文史館ではより広い範囲で炭鉱夫の組織が作られ、国立炭鉱博物館設立準備が進んでいる。近年では各機関でテーマと組織の特徴に応じた協力関係も密接化している。特に新平渓煤砿博物園区、菁桐鉱業生活館、猴硐砿工文史館の 3 博物館からの協力の下、平渓鉄道はこれら博物館を見学するための重要な交通手段となり、3 博物館が地域の炭鉱文化保存のために尽力している。

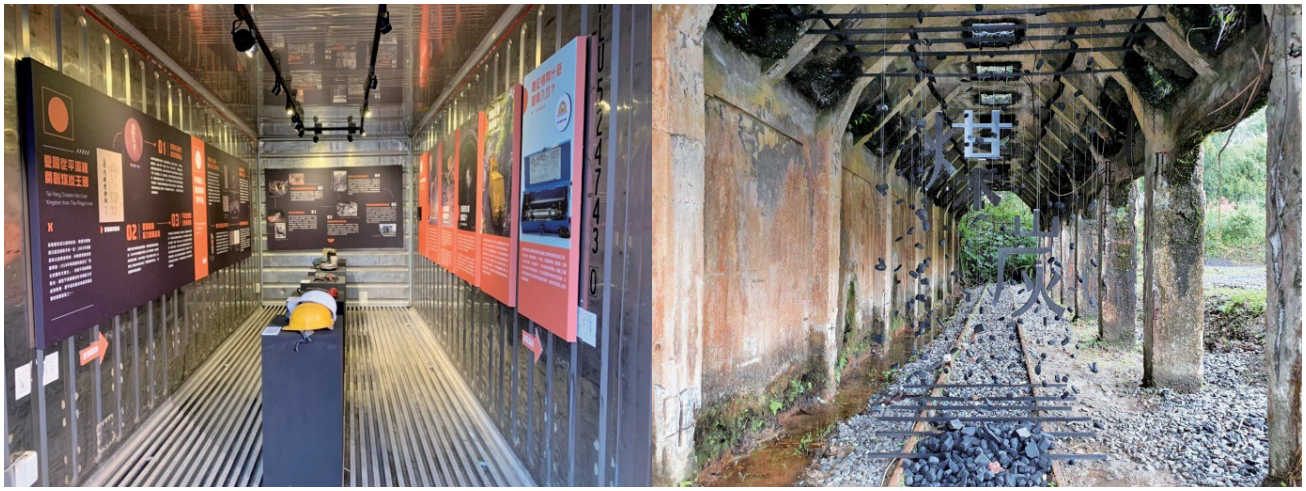

図 14　新平渓煤砿博物園区における平渓鉄道開通百周年特別展

4.4　平渓鉄道における炭鉱文化の系統的な保存の特徴

本研究により、平渓鉄道沿線に分布する炭鉱町でのフィールド調査とインタビューを実施し、その中から鉱山主と炭鉱夫が炭鉱博物館を通して鉱業文化価値を大切に保存していることを発見したのと同時に、炭鉱町における「人間的価値」を強調するものである。新平渓煤砿博物園区と猴硐砿工文史館で保存されている炭鉱文化の特徴を次の通りまとめる。

1．鉱業技術の記録：石炭採掘、支持、鉄道、精錬などの多様な技術を含み、これらは鉱業技術を通して設備道具の価値を強調して説明しなければならない。
2．鉱業地景の保護：産業の記憶は、鉱業空間における文化の内容を認め、系統的に相対的な価値と鉱業文化の地景を結び付ける必要がある。
3．炭鉱町における生活の再現：炭鉱夫が暮らす集落を基本として、鉱業を中心に炭鉱町の日常生活と民俗文化の多様性について検討する。
4．地域住民の参加を強化：炭鉱夫が行った歴史・文化調査の結果を活用して郷土教育と地域発展のための要素を解釈し、地域における文化の永久保存と再利用を進める。
5．地方再生が目標：鉱業文化施設を文化の道におけるホットスポットとしてとらえ、鉱業文化保存に向けた持続可能な発展のための公共プラットフォームとして再利用する。

平渓鉄道沿線に分布する炭鉱集落は、台湾でも重要な鉱業文化の道であり、近年は地域で自主的な調査を実施し、鉱業文化の道と田野学校等の政策を通して、平渓鉄道とその沿線にある炭鉱町の集落とをつなぎ、そこから平渓・猴硐の鉱業文化の道を促進し、さらに「鉱業系統」と「人間的価値」を示している。

5．結論

台湾の炭鉱産業は 1980 年代に衰退した後、平渓鉄道沿線にある炭鉱集落が率先して立ち上がり、炭鉱文化の保存に取り組み始め、その後菁桐・十分・猴硐地域に炭鉱博物館が設置された。社会からの平渓鉄道文化に対する関心が高まり、観光客が押し寄せるようになったものの、平渓のスカイランタンと猴硐の猫村観光政策だけでは地域の衰退問題を解決できるはずもなく、炭鉱文化の保存にも役立たなかった。30 年にわたり炭鉱文化保存が停滞し、社会からの関心が薄まる中、新平渓園区は鉱山主自らが系統的な炭鉱遺跡の保存に乗り出した。一方で、平渓鉄道開通百周年記念活動を機に、台湾の文化部が鉱業文化の道政策を打ち出し、その結果、台湾北部にあるすべての炭鉱資源をつなげることに成功した。猴硐砿工文史館では、炭鉱夫の立場から石炭採掘の労働史と炭鉱町での生活史という角度から猴硐の炭鉱遺跡と結び付けた。そして、さらに社会ネットワークからの支持を広げ、中央政府による国立炭鉱博物館設置の準備も始まった。

平渓鉄道沿線にはかつて台湾で最も重要だった炭鉱が集中しており、ポスト炭鉱時代に入り地域住民の主導の下、炭鉱文化保存運動が起こり、台湾全国で炭鉱遺産保護が重視されるようになった。本論文では、平渓鉄道では初期段階でまちづくりにより地域で炭鉱遺産を保護しようという動きが高まり、その後炭鉱博物館が設立されて炭鉱文化が保全されたことを発見した。しかし、炭鉱文化価値がなかなか評価されない中で、2020 年頃にようやく地域の炭鉱文化施設が再組織化され、政府から鉱業文化の道への後押しも取り付け、炭鉱文化保存の範囲と影響力が拡大した。こうして、台湾の炭鉱文化保存において石炭採掘技術と炭鉱町の文化、炭鉱に関わる有形文化遺産と歴史の姿の保護がより重視され、炭鉱文化が文化観光の中心とするようになった。地域参加による炭鉱文化保存は、住民からの要望と地域の再発展がより重要との見方から、新平渓園区では地方創生に積極的に乗り出す一方、猴硐砿工文史館でも炭鉱町の力を巻き込んだ動きが活発化した。これらはすべて炭鉱文化を活用することによって地域衰退問題を解決するためのものだった。以上のことから、炭鉱文化の保存には、鉱業関係者の支持が不可欠であると言える。地域の組織化を通して系統的に保存を行い、炭鉱博物館作を文化保全の拠点するのはもちろん、炭鉱夫や鉱山主が鉱業知識を世の中に広めていってこそ、炭鉱文化の真実性と文化観光の妥当性が確実に保護され、炭鉱町の持続可能な発展につながっていくと推察される。

6. 参考文献

⑴ 行政院文化部（2022）。社區營造及村落文化發展計畫（111-116）。文化部，頁 25-38。

⑵ 行政院文化部（2019）。108 年文化部文化政策白皮書，行政院文化部。

⑶ 林曉薇、黃俊銘（2021）。臺灣產業文化路徑建構之研究。文化資產保存學刊，第 57 期，頁 26-48。

⑷ 王新衡（2018）。煤. 記憶: 臺灣的黑金歲月。文化部文化資產局。

⑸ 王新衡（2022）。退休勞工自主保存產業與勞工文化之研究—以猴硐礦工文史館為例。南藝學報，25：41-63。

⑹ Dirk H. R., (2023). Community Perceptions of the Importance of Heritage Protection Relative to Other Local Government Council Operations, Journals Urban Science, Volume7, Issue4.

⑺ Oevermann, H., Degenkolb, J., Dießler, A., Karge, S., Peltz, U, (2016). Participation and reuse of industrial heritage sites: The case of Oberschöneweide. International Journal of Heritage Studies, pp.43-58.